

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎年、年度初めには全職員で理念を共有できるよう会議で確認している。また、年2回の新入職員研修時にも、まず一番に理事長から理念についての話がある。	玄関に法人理念、ホーム理念を掲示し、来訪者に分かるようにしている。「その人らしく生活して頂く」とは何なのかを職員会議やカンファレンスの中で振り返りの時間を設け話し合いを重ね、利用者や家族の思いに応えられるような支援に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	保育園との交流、地域行事への参加(イルミネーションづくり)、自治会の防災訓練に職員が参加、高校生の職場体験受け入れ等、行っている。来年度は高校生の福祉授業受け入れが決まっている。	区費を納め自治会の一員として活動し、情報も頂いている。地域のイルミネーションの飾りつけ活動に参加したり、近隣のゴミ拾いにも参加している。近くの保育園の園児との交流会が定期的に行われ利用者も楽しみにしている。高校生徒の職場体験や高校吹奏楽部の来訪もある。また、ボランティアの募集も盛んに行い、地域との繋がりを深めるように努力を重ねている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	茅野市主催の認知症キャラバンメイトを法人から5名受講し、そのうち2名が市のサポーター養成講座に講師として3回出席。来年度はサポーター養成講座そのものの開催を打診されている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域の中でボランティア活動に意欲的な方のパイプ役として生かされている。また、広報活動に行き詰っているところ、地区で活動する各種団体の中に登録できるか(アイリス自体が地域資源の一つになりうるので)委員が確認してくれることになっている	3ヶ月に1回複合施設として家族代表、区長、近隣住民代表、広域連合職員等、総勢20名以上の出席者で2時間近く時間をとり開催している。利用状況等の報告が行われ、毎回テーマに沿った話し合いが熱心に行われている。出席者からは「良い話」や「厳しい意見」など、積極的な提案・助言が多く、複合施設全体を良くしていこうという前向きな会議となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	認定調査を施設内で行うが、家族も同席することが多い。茅野市はほとんど毎月事業者会議が行われているので、それに出席している。	介護認定調査には市の担当者が来訪し、基本的には家族同席の上実施している。市主催の事業所連絡会に参加し、情報の共有化を図っている。また、市、広域連合の勉強会には参加するようにしている。認知症サポーター養成講座の講師に管理者が出向いている。月1回、介護相談員2名の来訪があり利用者と交流を図り、結果は管理者に口頭で報告されると共に広域連合より書面にて報告をいただき支援の参考になっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、全職員を対象に「身体拘束」に関する研修会を行っている。転倒リスクの高い方には、家族の承諾を得て、センサーマットも使わせてもらっている。低床ベッドの活用、見守りしやすい居室配置等、状態の変化に合わせて検討を重ねている。	「ここにあるのは私の暮らし」を支援の基本として取り組んでいる。全職員対象に年1回身体拘束の研修会を行い徹底を図っている。新入職員については第一に身体拘束をしないケアについて教育を行い支援に取り組むようにしている。現状、利用者の状態が安定しているため、外出傾向の強い方もなく入口は開錠されている。家族に話をし転倒防止や安眠確保のため、夜間、センサーマットを使用することがある。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎年、虐待に関する研修会を行っているが、今年度は、グループホームの中だけで、「コールが頻回な利用者さんについての事例検討」を行い、具体的事例に基づき言葉の暴力について考える時間を作った。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	「成年後見制度」や「日常生活支援事業」の研修を組み入れたいと思ってきたが、今現在対象者がいないと、学ぶことが沢山ある中で、優先順位が低くなってしまって時間がとれないのが現状である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をとって丁寧に説明している。特に利用料金や起こりうるリスク、重度化や看取りについての対応方針、医療連携の体制等については詳しく説明し、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情。要望は宝。聞こうと思わなければ聞かえてこないで、どんな些細なことも言っていたらいいよ、常日頃から、こちらから声をかけている。利用者本人から言ってきた時はその内容を家族にもお話している。内容は運営推進会議で報告している。	運営推進会議に家族代表の参加もあり積極的な意見を頂いている。家族会も立ち上げ家族の意見を汲み取る努力をしている。利用者や家族に体を寄せ合い、目線を合わせて話をすることに心掛け気持ちを汲み取るようにしている。家族の来訪は毎日の方から1~2ヶ月に1回の方まで様々であるが行事の際には案内をしている。また、年2回、看護師と介護福祉士より其々利用者個々の状況について家族に便り報告し喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回の複合施設会議には三事業所の代表が出席し、意見や提案を出し合っている。今年度は全職員を対象に管理者、理事長との個人面談を行い、意見を聞く機会を作った。働き方の希望、将来への方向性等聞くことができた。	月1回約2時間の職員会議を行い、更にユニット会議、カンファレンスなど、月3回ほど話し合う機会があり、意見や提案を出し易い環境を作っている。昼間、利用者のお昼寝タイムの30分間を大切に常に話し合うようにしている。年度初めに各職員が資格取得目標等の年間目標を立て、理事長、管理者と個人面談を行い、スキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	やる気のある職員には研修にも積極的に参加してもらっている。勤務時間、日数、給与も色々な条件の職員がおり、それぞれの環境で働いている。資格取得を応援する制度が就業規則に定められている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月全職員対象の研修を実施しているほか、介護福祉士取得を目指す職員にはその応援制度がある。また、経験、やる気に合わせた一人ひとりの年間研修計画を定めている。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度、長野県宅老所、グループホーム連絡会に加入した。また、交流やネットワークづくりまで進んでいないが、今後進めていきたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談では本人に会って、心身の状況や本人の気持ち、環境、何に困っているのか等、細かく教えていただき、入所初日は面談した職員が対応し、安心して新しい家に入ってこられるよう配慮している。また、全職員に、配慮する点を細かく伝えるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談で、ご家族の困っていること、不安なこと、要望等ゆくり細かくお聞きする。その上で、私たちにできること、出来ないこと、ご家族に協力していただきたいこと等も伝え、「協力し合って利用者本人の生活を支えていきましょう」というお話をします。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所の相談を受けた段階で、その方が本当にグループホームが良いのか、それとも他のサービスで在宅生活が可能ではないのかという視点で関わり、実際、他の在宅サービスを選択された方もいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活する者同士として、本人の力を発揮できる場面作りを重要と考え、食事づくり、洗濯物を干す、たたむ等、暮らしの中でできることはやっただき、何かしてもらった時は必ず感謝の気持ちを言葉で伝えている。実際、季節行事では教えてもらう場面も多い		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お風呂に入りたがらない方がいるが、息子や長年一緒に暮らしてきた嫁さんならうまく声掛けできる。そのように家族でなければできないこともある。他にも、甥っ子が大好きな方、息子さんの声を聴けば安心する方等々ご家族に気持ちよく協力していただいている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	所属していた踊りの会の発表会には継続的に出かけられるよう、送迎を支援したり、馴染みの美容院に出かけたりしている。毎月娘さんと整体に通っている利用者もいる。毎日新聞を届けに来るご家族には爽やかな朝の挨拶や世間話が欠かせない。	友人や知人、教え子の来訪が度々ありお茶をお出しし話が弾むようお手伝いしている。手紙や年賀状を出されたり、携帯電話で家族に電話される利用者もいる。家族の協力で美容院や回転ずしなど馴染み店に出掛けたり、墓参りに出向く利用者もいる。入居以来、仲良くなった利用者も何組かありホールで寛いでいる姿も見られた。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	行事等で会話の中に入ったり、料理をする時も 手の早い人だけに仕事を任せないで色々な方に 関わっていただく等、配慮することで孤立せず、 支えあえるような支援に努めている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族 の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に移られた場合でも(特養への移動2 名あり)利用者の状況や様子を口頭や書面で伝 え、きめ細かい連携に努めている。顔を合わせる ことがたまにあるが、声をかけ、ご家族との馴染 みの関係を切らないようにしている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	日々の会話から本人の思いを聞き、出来るだけ 意に添うよう努めている。また、希望が出された ときは、カンファレンスで話し合い、希望に添った 支援ができるよう努めている。	利用者一人ひとりの自分の役割、得意なことを見 出すためホームとして出来ることの支援に取り組ん でいる。包丁を使うことが得意な方には干し柿作り で「柿の皮むき」をやっていたりというように本当 の思いを汲み取る努力をしている。日々、接する 中で小さなことでもアセスメントを行い、情報 を共有し希望に沿った支援が出来るよう取り組 んでいる。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努 めている	入所時にセンター方式の暮らしの情報シートへ の記入依頼をするが、入所後もご家族から話を 聞く中で、馴染みの暮らし方のヒントを得て、そ れに沿えるよう支援している。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する 力等の現状の把握に努めている	日常生活の中で、生活のリズムやその日の体調 や気分の変化に気を配り、スタッフ間で口頭や記 録で情報を共有し、現状の把握に努めている。 関わりの中で、ついさっきのことも忘れる方が寿 司の巻き方がうまい等、発見もある。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方 について、本人、家族、必要な関係者と話し合 い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即 した介護計画を作成している	月に1回～2回のカンファレンスを実施し、ケアの 方法やプランの見直し、新たに加えるケアプラン について話し合いを行っている。	職員は1～2名の利用者を担当している。月1～2回 のカンファレンスを行い、モニタリングは3ヶ月に 1回実施している。計画の更新期間は6ヶ月～1年 とし、変化があれば即時見直しを行っている。プ ラン作成時には利用者や家族の要望を聞き計画 作成を行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は気づき、関わりを中心に個別に記 録されており、職員間で情報の共有がなされて いる。また、個別の健康管理台帳もあり、日々の 健康面の変化に気づきやすい。介護計画はそれ らの情報をもとに見直しを行っている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズ に対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟 な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況や外出計画、家族の都合のつか ない方の受診の付き添い(眼科、歯科等)、車い す利用の方の病院への送迎等、その時の必要 に応じて柔軟に対応している。			

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議を通じて、昨年は施設のお祭りにボランティアの方の協力を得た。近くの保育園との交流も継続している		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者様それぞれの体調、体力、身体機能、家族の事情に合わせて、受診と往診の両方に対応している。看護師が、都度、電話やFAXで連絡を入れ、主治医の指示を仰いでいる。	若干名の利用者が通院しているが、他の利用者はホーム協力医、在宅主治医の月1回～2回の往診で対応している。看護師はホーム専属1名、准看護師1名、複合施設看護師1名の3名体制で、連携を取りつつ24時間体制で対応している。歯科も協力医の往診で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、医療連携体制を整えている。介護職員は利用者の体調や、表情の変化に気を付け、気づいたことを看護師に報告し、連携をとっている。複合施設なので同一敷地内他事業所の看護師の協力もある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院になるときは主治医から入院の協力医療機関へ連絡を入れ、スムーズな受け入れができています。医療連携相談室とも連絡はスムーズなので、状況、退院日の把握、退院後の注意点等、必要な情報はすぐわかるようになっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向を踏まえて対応していくことを看取りに関する指針として、契約時に説明し、意向の確認をしている。職員は看取り研修を受け学びを深めている。主治医と連携を取り、家族への説明の場を作り、看取りプランの計画実施を行っている。	看取りに関する指針があり、利用契約時に説明し以降も確認を行い、事前確認書を頂き看取りケアプラン作成後実施に移している。開設以来3名の利用者の看取りを行い、職員で初めて経験する人も多かったが看護師の指導に従い対応し成長を遂げ、家族からも感謝されている。看取りの考え方について年1回研修会を実施し理解を深めると共に的確な対応が出来るよう取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時にいざと言う時、慌てないよう、研修を職員全員が受けている。緊急時についてのマニュアルもすぐわかるところへ掲示してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防署の協力を得て、利用者参加の避難訓練を行っている。訓練後、事業所で振り返りを行い、対策を共有している。	年2回、消防署の協力を得て防災避難訓練を実施している。緊急連絡網を使つての通報訓練や利用者も参加しての夜間想定訓練も年1回行い、車イスの方も含め全員非常口まで移動し訓練を行っている。また、当地区は寒い所なので非常階段が雪によって凍らないよう気をつけこまめな雪かきを行っている。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入所時、どういふ呼ばれ方をしたいか確認し、本人又は家族の希望する呼び方で呼んでいる。依頼型の言葉かけは「誠心会のこころ」に記されており、基本であるが、親しみが馴れ合いにならないように注意している。	プライバシー保護の勉強会をコンプライアンスも含めて実施し徹底している。利用者の前では他の利用者の話をしないよう職員間で心掛けている。同じ目線で寄り添い、依頼型の丁寧な言葉で声掛けをすることにより自然に返事をしていただき気持ち良く生活していただけるように取り組んでいる。声かけは希望に合わせて親しみを込め「さん」付けでお呼びしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご自分から希望を言うことが難しい方には職員から声をかけるようにしている。「どうしたいですか」「どちらにしますか」等、自分で選ぶことができるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	自室で過ごしたい方、ホールで過ごしたい方、テレビを見たい方、横になりたい方、それぞれに過ごしていただいている。食事やレクリエーションの時には声をかけ、メリハリも付けられるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	昔からきているお気に入りの服、ご自分で作った服を着ている方もいる。服を選べる方には選んでいただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食作りの際、切る、混ぜる、味見等、一緒にできる所は行い、食事が楽しいものとなるよう支援している。また、下膳、食器洗い等もやっていたいっている。	ほぼ全員が常食で食事が摂れている。時間を掛けても「箸」で食事をすることに力を入れ取り組んでいる。職員が寄り添い最後まで食事をする姿が見られ、微笑ましく感じた。お手伝いは準備から片付けまで力を合わせてやっていただき、楽しい食事ができるよう心懸けている。月1回は巻き寿司等、全員での手作りの食事会を実施している。また、月1~2回、おやつの際に誕生会を行いケーキを作って楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取量が1日を通して一目でわかるよう健康管理台帳に記入してあり、朝摂れなければ10時に、といった形で水分摂取量に気を付けている。普通食の摂取が難しくなった方には食事形態を変えて提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の状態に合わせて、毎食後、自室洗面台に行っていただき、声掛けや介助で口腔ケアを行っている。その際、口腔内の状態把握にも努めている。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	失禁が見られる方には排泄記録法をつけ、パターンを把握し、声かけで随時の誘導ができるよう努めている。使用する物品は一人ひとりに合わせて職員同士で検討しあっている。	ほとんどの方が一部介助で布パンツとパット使用の方が多。排泄チェック表で現状を掴み情報を共有し対応している。利用者の尿意に従うことを第一に考えているが見守りの中で定期的に声掛けを行い誘導をするようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	苦手でない方には、毎食事牛乳の提供とヨーグルト類も比較的回数多く提供している。レクリエーションや、歩行訓練等、毎朝運動する時間をとっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	できるだけ本人の希望を考慮し、午後に入浴したい方、ゆっくり入りたい方、熱めの入浴が好みの方等、体調にも考慮しながら希望に沿えるようにしている。「入れる風呂」ではなく楽しみに「入る風呂」と考えます。	ほぼ全員の方が一部介助である。少なくとも週2回の入浴を行っているが希望に沿って何日でも対応するようにしている。浴室は窓が大きく「八ヶ岳」を見ながらの入浴は気持ち良く開放感がある。季節に応じて菖蒲湯、かりん湯、かぼす湯、ゆず湯などの香りを楽しみ、本年は入浴レクリエーションで外に出掛ける予定があるという。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後は午睡として短時間だけ横になっていた。就寝時間がまちまちでテレビを見てから寝る方、娘に電話をかけてから寝る方、自由な時間に寝ていただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個々のファイルに整理してあり、いつでも確認できるようになっている。名前、時間、日付を読み上げ、服薬ミスのないよう努めている。服薬変更があったときは体調の変化について看護師と連携をとっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で役割を持っていただくことで自信や活力につながる取り組みを行っている。洗濯物をたたむのが好き、調理が得意、テレビが大好き等、それぞれに楽しみ事を持ち、生活できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	週に2回、昼食の材料の買い物に行くときに、天気や体調を見ながら、その日行きたいという方を誘っている。また、春、夏、秋にかけ外食や花見等の行事を企画し、ご家族にも声をかけ、支援している。	車イスの利用者が数名いるが、他の方は杖、歩行器を使いながら自力歩行することができる。週2回交代で近くのショッピングセンターへ買い物に出掛けている。季節が温かくなると近隣の公園に散歩に出掛けている。日常的にホームの中や階段を使って複合施設建物内を歩かれる方もいる。今年も外出レクリエーションとして花見、紅葉狩り、ブドウ狩りなど数多く計画し家族の参加もいただき楽しい外出ができるよう取り組む予定であるという。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が所持している方もいるが、買い物の希望があったときは一緒について行っている。事務所でお金を預かっている方については買い物に行くときに本人に渡し、本人がお金を支払えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より希望があるときにはいつでもかけている。ご家族には理解していただいている。また、本人が携帯を所持し、毎晩娘へかけている方もおり、充電等職員が気を付けている。はがきを頂ければ代読し、年賀状を出すのを頼まれたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は落ち着いた色が使われており、外の景色もよく見え、明るくゆったりとした造りになっている。また、季節に合わせた手造りの飾り物をして四季を感じていただけるようにしている。	和風旅館を思わせる複合施設であり、エレベーターを降りまず感じることはまさに高級温泉旅館にでも来たような雰囲気である。天井から床まで落ち着いた色で統一され、照明、ホールのイス、テーブルにも拘りが感じられる。広い共用部分の大きな窓からは山の景色が一望でき爽快である。空調はエアコンと床暖房が併用され利用者が一日を快適に過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに食事席以外のソファを置いている。また、展望室には木のぬくもりのテーブルと椅子が置かれ、時々外を見入っている方もいる。テレビ前のソファ席は昼寝する人もいたり、歌謡コンサートの時は何人かで並んで座って見ている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際、ベッドと備え付けの物入れ以外は使い慣れたものを持ち込んでいただくようお願いし、タンス、テーブル、椅子、コタツ等、個々にセットしてある。	各居室には洗面台とトイレが完備されており生活のしやすさが感じられる。広さも充分にあり、ベランダ付きの窓は大きく開放感がある。使い慣れ、年季の入ったタンスや家族が来たときに寛ぐイス、テーブルなどが置かれ、更にこたつを作ってテレビを楽しむ方なども思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーの造りになっていて、廊下・食堂以外にも共用のトイレや浴室等随所に手すりを設置している。キッチンを利用者が使いやすいよう低めの高さにしてある。		